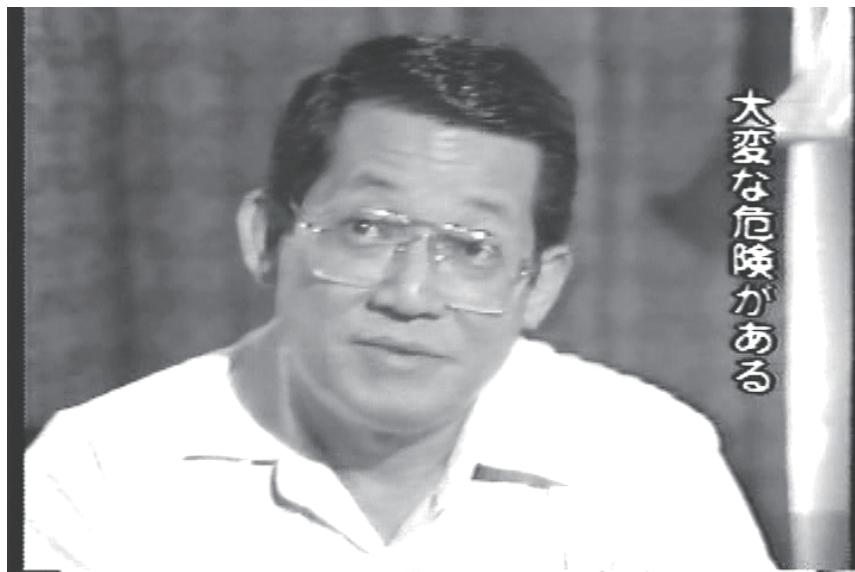


# ●報道特集『アキノ白昼の暗殺』

## 特ダネは一日にして成らず

三好 和昭 (TBS)



1983年8月21日マニラ国際空港で暗殺されたベニグノ・アキノ氏(享年51歳)  
前夜、台北で“大変な危険がある”とインタビューに答える。

みんぐひ  
おひこ  
うみ  
民放史  
題字  
中川  
順

最近、フィリピンのニュースは日本のメディアにあまり登場しないが、かつて世界の耳目を集めた大事件があった。1983年8月のアキノ氏暗殺事件。あれから30年近い歳月が流れた。アキノ氏とは、当時のマルコス独裁体制を脅かす野党のリーダーであったが、故国を追われアメリカに亡命していた。氏が帰国を決意し、マニラ空港に着いた途端、暗殺事件が勃発する。去年当選したアキノ現大統領の父親である。TBSの報道番組『報道特集』は事件の1週間後、83年8月28日に『アキノ白昼の暗殺』と題する1時間ものを放送した。誰が考えても「体制側の犯罪」なのが証拠がない。そこで政府発表の矛盾点を丹念にあぶりだすことで真相に迫ろうとした。

反響は大きく、特に現地フィリピンにはすさまじいインパクトを与えた。のちのマルコス失脚、コラソン・アキノ(アキノ氏の妻)が、筆者(当時の番組プロデューサー三好)の記憶も曖昧なので、新聞協会発行の『新聞研究』(84年10月号)に掲載した小文を転載することでお許しをいただきたい。

「あすは殺されるかもしれない」

「撃たれたアキノ氏の死」確認のニュースが入ったのは、私が担当している番組『報道特集』の放送中であった。外信部からスタジオへ第一報が届いた時、数か月前の、ある決断が深い感懷を伴つて頭をよぎつたが、ともかくオーシャンエア真最中のことだ。急いで原稿をキヤスターに渡し、企面モノが終



機内で記者会見するアキノ元上院議員

賞。TBSの報道番組『報道特集』は事件の1週間後、83年8月28日には『アキノ白昼の暗殺』と題する1時間ものを放送した。誰が考えても「体制側の犯罪」なのが証拠がない。そこで政府発表の矛盾点を丹念にあぶりだすことで真相に迫ろうとした。

反響は大きく、特に現地フィリピンにはすさまじいインパクトを与えた。のちのマルコス失脚、コラソン・アキノ(アキノ氏の妻)が、筆者(当時の番組プロデューサー三好)の記憶も曖昧なので、新聞協会発行の『新聞研究』(84年10月号)に掲載した小文を転載することでお許しをいただきたい。

「あすは殺されるかもしれない」

「撃たれたアキノ氏の死」確認のニュースが入ったのは、私が担当している番組『報道特集』の放送中であった。外信部からスタジオへ第一報が届いた時、数か月前の、ある決断が深い感懷を伴つて頭をよぎつたが、ともかくオーシャンエア真最中のことだ。急いで原稿をキヤスターに渡し、企面モノが終

わったところで速報を突っ込んだ。昭和58年8月21日のことである。

このたびの新聞協会賞受賞は、テレビ局という外部からは一見華麗にして浅薄なイメージの企業の中において、普段は地道な取材活動を続け、あまり報われることの少ない民放報道セクションへの身に余る評価として感激にたえない。これを機会に『アキノ白昼の暗殺』が放送されるまでの内幕をあえてさらすのも、今後のテレビ報道に何らかの意味があろうかと思うからだ。

テレビをご覧にならなかつた方のために中身をあらまし紹介しよう。番組は三つのパートに分けた。第一部は暗殺直後の極度に混乱するフィリピン情勢の記者レポート。第二部は「だれが犯人なのか」を推理する番組のハイライト部分。第三部は「なぜアキノ氏は帰国を急いだのか」というマルコス体制下の問題分析である。

番組で光彩を放つたのは、いうまでもなくTBSのスクープとなつたアキノ氏の「あすは殺されるかも知れない。事件は空港で一瞬のうちに終わる」という運命的な



連行のため機内に乗り込んだ兵士と握手するアキノ氏

アキノ機に同乗していたジャーナリスト——TBSの田近記者、横井カメラマン、磯野カメラ助手、共同通信の上田記者らの証言が続く。1年たつた今も真犯人が特定できないのは同行ジャーナリストが全員だれも「射殺の瞬間を見ることができなかつた」からだ。

台北でのインタビューと、マニラ空港での事件現場のVTRである(事件現場のVTRは米ABCも同行取材しており、2つのVTRがその後の事件究明への最大の手がかりとなつてゐる。写真はTBSのVTRから)。番組はナゾだらけの事件の解明に向かう。

ボーディングブリッジの最初の出口から連れ出されたアキノ氏は、上部の踊り場を直角に右折してタラップを降りて行った。機内から追つかけってきたジャーナリストたちは出口前で何人かの男の人垣にさえぎられて、降りるアキノ氏を



アキノ氏の遺体(右の白い服)が横たわる

見ることは物理的にできない。従つてVTRも人垣の頭越しに空を映しているだけで、それから8・5秒後に第一発の銃声を記録して5秒後に第二発の銃声を記録している。これが運命の凶弾となる。『報道特集』のスタッフの一員である山本清貴記者はVTRを何十部から上あごに斜めに抜けている。それでは踊り場から4人の兵士青シャツの民間人ガルマン」と発表されたが、遺体の銃痕は、後頭部から上あごに斜めに抜けている。

それでは踊り場から4人の兵士に囲まれたアキノ氏は8・5秒でガルマンの待ち受ける地面に降り立てるのか。実験を繰り返すと不可能ではないが、かなりの無理がある。その上、ガルマンの凶器「S&W 357マグナム」を至近距離から発射した場合、頭部はメチャメチャに破碎され、遺体にあるようなきれいな銃痕は残らないとす

る銃器専門家の証言も得られた。もう一人の兵士が加わつてゐる。



タラップの下に倒れていたアキノ上院議員

こうして事件はおぼろげながら輪郭をみせてきた。

そこでわれわれは、①連行兵士は3人でなく4人、②ガルマン犯行説は合理性に欠けると、いずれもフイリピン側発表に疑問を呈し、「アキノ氏はタラップを降りる途中で連行兵士に撃たれた可能性が大きい」と結論づけたのである。

### VTR海賊版が出回る

事件から1週間、ミステリアスなナゾ解きの関心もあつてか放送後は視聴者から電話が相次いだ。「まるで推理小説」「フイリピンつて何と恐ろしい国なんでしょう」

同業他社からはおほめの言葉も多く、問い合わせやら取材の申し込みが内外の報道機関から数多く寄せられた。AP通信、ロイター通信、ニューズウイーク、西ドイツ放送などが「東京発」で「兵士四人説」を流し始めた。以後、フイリピン政府は前言をひるがえし「連行兵士は実行部隊の四人に加え指揮官一人の合計五人」と訂正発表を行うにいたる。

事件直後マニラ市内は「二ノイアキノ氏の愛称」を返せ」の大

デモに揺れた。

マルコス長期政権の弾圧政治と進まぬ経済発展は、アキノ暗殺をきっかけに民衆を急速に反政府運動へと走らせた。そしてわれわれを驚かせたのは『報道特集』のコピービデオテープ、つまり海賊版がひそかにフイリピンに持ち込まれ、出回り始めたことだ。ついには千ペソ(約二万円)のプレミアムがついたり、英語による吹き替え版が登場、秘密上映会が開かれて現れた。

真相究明を求める声はその後もやまず、フイリピン政府は、糸余曲折を経て現在のアグラバ女史を委員長とする「真相究明委」をスタートさせたのだが、この番組の指摘が委員会に与えた影響は大きかった。

事件の起きる数か月も前のことになるが、『報道特集』の初代アンカーマンで現国際部長の北代淳二氏が極秘情報を伝えてくれた。アキノ氏が近く帰国する。TBSで同行取材するなら先方はOKする」というもの。

アキノ氏と金大中氏とともに故国を追われアメリカで事実上の亡命生活を強いられた野党の指導者。北代氏は両氏との接触が長く、去年正月にはニューヨークで金大中

上の協力はできないとするTBSの原則から、われわれはこれを拒否したことを見記しておく。



機中に入つて来た連行兵士

に独占インタビュー「拉致・殺害の命令は朴大統領が直接下した」との証言を得た記者である。北代氏は『報道特集』在籍当時、アキノ氏追放中のドキュメンタリー企画で、前記山本記者とともに東京のホテルでインタビューを収録したのが56年のこと(これは結局オクラになつてしまつたが)。以後、東京とボストンで会合は続けられ、お互いの信頼関係は強くなつていた。

マスコミの同行取材は身の安全に有利」というアキノ氏側の計算もあつたと思われるが、番組制作者としての私は、生来の貧乏症からツッキーな面もあるが決して平坦な道ではなかつた。事件の起きる数か月も前のことになるが、『報道特集』の初代アンカーマンで現国際部長の北代淳二氏が極秘情報を伝えてくれた。アキノ氏が近く帰国する。TBSで同行取材するなら先方はOKする」というもの。

アキノ氏と金大中氏とともに故国を追われアメリカで事実上の亡命生活を強いられた野党の指導者。北代氏は両氏との接触が長く、去年正月にはニューヨークで金大中

やカマラマン、番組のスタッフまで証人換問しようとしたが、捜査

治家の帰国、しかもアキノ氏のようないか、と。この『再決断』こそが、あの決定的映像に結実、新聞協会賞受賞につながるカギとなつたのだ。

こうして同行話にのつた外信部は、田近記者、横井カメラマンを台北に派遣。取材クルーは帰国途上のアキノ氏と落ち合つた上、マニラ空港に向かう。機上で快活にしゃべるアキノ氏、そして到着、連行兵士の出現から百十五秒後に運命は暗転する。

VTRは『白昼夢』を余す所なくとらえていた。

### ダメモトの所産

話は戻るが『同行取材は外信部』と決まつてから数か月、その間、毎週毎週の『報道特集』の制作に忙殺され、アキノ氏の件は私の念頭からすっかり消えていた。そこに悲報。帰宅してみた11時の『ニュースデスク』はいまだに忘れられない衝撃を与えた。

田近記者の大スクープ、激しく胸が高鳴るのを抑えかねた一瞬

2日後の定例の企画会議。普段は2時間で終わるのにこの日は4時間も議論を重ねた。事件はナゾだらけである。確かにスリリソングで話題性に富んでいる。その上、特ダネにも恵まれた。しかし取材

時間はわずかに三、四日しか残されていらない。どこから攻めていけば一時間の番組ができるのか。甲論乙駁、議論は百出したがとにかく突っ込んでみよう。会議の終わるころ、おおまかな構成案が形になり始めた。各記者の担当を決め



スタジオで銃の発射角を説明する料治キャスター

る者、スタジオセットの打ち合わせに走る者、VTRの徹底分析にかかる者、全員フル活動に入つた。それからというものは夜を日に継いでの激戦だつた。そして放送は、オフエア数分前になつてやつと全部の素材の編集が終わる。

この事件は多くの報道陣に囲まれた中での凶行、しかしだれが撃つたのか、その瞬間の記録はどうこにもないという難問である。各種のデマ情報、混乱する証言がとびかい、事件の歴史的位置づけもゆがめられる可能性があつた。そこで唯一の物証であるVTRを入念に検討し、そこから「真実」を発見しようとしたわれわれの狙いは、取材時間の制約から粗雑の感はぬがれないが、ほぼ満足できるものとなつた。

「ダメモト」という言葉がある。テレビ界の一種の業界用語で、どのへんまで「普及」しているか不明だが「ダメでモトモト」の略だ。見通しがたたないからやめるのではなく、何事も冒険精神でチャレンジしてみよう、失敗してもいいではないか、という意味である。

— 18 —



群衆に送られる棺の車

### 事務局からのお知らせ

資料 TBS

☆ 北陸民放クラブ・富山事務局

〒930-8585

富山市牛島町10-18

北日本放送総務人事部内

TEL 076-432-5555  
TEL 076-432-5555  
〒870-0938

☆ 九州民放クラブ・大分事務局  
大分市今津留3-1-1  
(株)大分放送総務部 気付  
0975-5811  
0975-35811  
FAX 0975-35811